沖縄県の各地域間の心身障害児の医療，療育，福祉の連携の比較検討

落　合　靖　男

1）はじめに

沖縄県の療育機関は那覇市（沖縄整肢療護園、那覇市立心身障害児療育センター）、沖縄市（沖縄小児発達センター）、母子通園センターとして浦添市、宜野湾市、沖縄市、読谷村、石垣市に設置されている。

都市部に療育専門機関があるため、遠隔地の人人にとって利用困難な状況にあり、それらを解消すべく、県の児童相談所を中心として北部地区において、昭和55年から、南部地区においては昭和56年から、宮古・八重山地区においては昭和57年から心身障害児の早期発見、早期療育事業を開始した。今回は療育専門機関や母子通園センターの設置されている都市部と、定期巡回療育事業を実施している遠隔地と、巡回療育が行なわれていない離島における心身障害児の実態と、医療、療育、福祉の連携について調査したので報告する。

2）方　法

平成２年１月～12月迄における母子通園センター、沖縄小児発達センターをＡ群、定期巡回療育事業をＢ群、各離島の心身障害児をＣ群とし、疾患別、療育内容、療育スタッフ、医療、福祉の現状について調べた。（図１）

3）結　果　（表１，表２）

① Ａ群について（母子通園センター及沖縄小児発達センター）

那覇市立心身障害児療育センターにおいては脳性マヒ11名、知恵遅れ22名、その他２名となっている。療育内容は理学訓練が週１回、保育指導が週３回、言語指導、心理判定、福祉相談は必要に応じて行なっている。医師による医療相談は月１回定期化されている。スタッフは医師、ＰＴ、ＳＴ、保母、心理判定員、福祉相談員となっている。

沖縄市立つくし園については知恵おくれ10名が通っている。保育指導が毎日行なわれ、他に心理判定、医療相談が月１回行なわれている。理学訓練等については発達センターで受けている。

浦添市立浦添タンポポは、脳性マヒ３名、知恵遅れ10名、その他１名となっている。保育指導が毎日、理学訓練が週２回、言語指導が２週に１回、医療相談が２ケ月に１回行なわれている。スタッフは医師、ＰＴ、ＳＴ、保母、心理判定員となっている。

宜野湾市立愛育園には脳性マヒ３名、知恵遅れ16名が通っている。保育指導が毎日行なわれ、理学訓練は月１回、言語指導が週１回、発達相談が１ケ月に１回の割合で行なわれている。医師による医療相談は年１回となっている。スタッフは保母、ＰＴ、ＳＴ、心理判定員となっている。

読谷村立母子通園“ふくぎ”については、脳性マヒ１名、知恵遅れ６名となっている。保育指導のみで、スタッフは保母だけとなっている。週に２回の割合で一般保育所に出向き統合保育が試みられている。理学訓練、言語治療、心理判定、医療相談、福祉相談等については当小児発達センターを利用している。

八重山石垣市に平成元年母子通園センター“ひまわり”が設立され、毎日保育が保障されるようになった。脳性マヒ４名、知恵遅れ６名の児童が通っている。スタッフは保母のみで、理学訓練、言語治療、医療相談、心理判定等については月１回の定期巡回療育の中で治療がなされている。

当小児発達センターについて、通所部と外来療育部、一般外来と３つの部門についてみる。通所部は措置であり毎日通うことを原則としている。脳性マヒ26名、ＤＭＰ１名、Rett 症候群１名、脳炎後遺症１名、二分背椎１名が登所している。療育内容については理学訓練が週３回、保育指導が毎日、言語指導が週１回の割合で、その他に看護指導、医療相談、心理判定、福祉相談が随時、日常的に対応できるシステムにある。スタッフは医師、看護婦、理学療法士、ＳＴ、保母、心理判定員、作業療法士、ケースワーカーとなっている。

外来療育部はそれぞれの地域で療育を受けることができない在宅心身障害児に対する総合的療育援助を行なうことを目的としており、ダウン症40名、脳性マヒ10名、知恵遅れ13名のケースが週２回通っている。理学訓練、言語指導、心理判定、保育指導、医療相談、福祉相談が総合的に行なわれている。スタッフは通所部と同様である。

一般外来については脳性マヒ児についてのみ調べた。48名の対象児がおり病院からの紹介で来所し、乳児期前半のケースが多い。医療相談、理学訓練を週１～２回の割合で指導後３ケ月後には母子入所による総合的な療育支援の体制をとっている。スタッフは医師、看護婦、ＰＴ、ＳＴ、心理判定、ケースワーカーである。

② Ｂ群について（定期巡回療育事業）

北部地区における定期巡回療育は月２回実施している。対象児は脳性マヒ33名、知恵遅れ42名、その他34名となっている。理学訓練、言語指導、心理判定が月２回実施され、医療相談、福祉相談は月１回行なわれている。スタッフは医師、看護婦、ＰＴ、ＳＴ、保健婦、心理判定員、福祉相談員となっている。

南部地区は月２回づつ理学訓練のみが行なわれている。スタッフはＰＴのみで、脳性マヒ15

名、知恵遅れ１名となっている。

八重山地区は理学訓練、言語指導、保育指導、看護指導が１ケ月に１回で、医師による医療相談は２ケ月に１回となっている。脳性マヒ14名、知恵遅れ12名、その他２名となっている。スタッフは医師、看護婦、保母、ＰＴ、ＳＴである。

宮古地区は八重山地区と回数、療育内容、療育スタッフ共同様である。脳性マヒ10名、知恵遅れ24名、その他３名のケースがそれぞれ療育指導を受けている。

③　Ｃ群について（巡回療育を実施してない離島）

伊江村には脳性マヒ１名、知恵遅れ３名の小児がいるが、北部地区の巡回療育の中で月２回の理学訓練とその他言語指導、心理判定、医療相談、福祉相談を受けている。

伊平屋村には知恵遅れが１名いるが北部巡回の中で言語指導、医療相談、心理判定などを受けている。

久米島には脳性マヒ１名、知恵遅れ１名がおり、１ケ月に１回本島まで出かけ理学訓練、医療相談を受けている。

南大東村では１名の知恵遅れがおり、半年に１回の割で訪れる小児保健協会の定期健診で相談している。

栗国村では脳性マヒ児が１名おり、２週間に１回の割で飛行機、バスによる方法で当小児発達センターにて、医療相談、理学訓練を受けている。

伊良部町には脳性マヒ２名、知恵遅れ１名の小児がいて、月１回宮古地区の巡回療育の中で理学訓練、保育、言語指導を受けている。

与那国町では知恵遅れが１名おり、現在保育所入所中である。医療相談、発達相談については八重山地区の巡回療育の中で受けている。

4）考　　案

沖縄県の心身障害児の医療、福祉、療育の連携状態について、沖縄県を３つに分け（Ａ群：都市型、Ｂ群型：遠隔型、Ｃ群：離島型）比較検討した。各疾患（ＣＰ、ＭＲ、Down 症、その他）とも地元にて療育実施可能の状態であるが、その質、量ともに差がみられた。　Ａ群では療育施設、母子通園センターが地域にあるため、どの障害にも対応できるスタッフ（医療、理学療法士、言語訓練士、その他）に恵まれている。また訓練、保育等も措置形態をとることが可能なので、毎日の療育が保障されている。

福祉としては県の児童相談所も那覇市と沖縄市に設置されており、医療、療育、福祉のすべての面でＢ群、Ｃ群に比較し、充実している。Ｂ群地区は定期巡回療育が主であり、スタッフ構成はＡ群と同じであるが、回数が月２回と量的に少なく、親の方からも地元での療育施設を希望する者も多かった。しかし、各保健所内（名護保健所、宮古保健所、八重山保健所内に県の児童相談所、福祉事務所、保健所、療育施設が一同に介するため、医療、療育、福祉の連携という面では、そこに相談に訪ずれれば、訓練から福祉の手続き等が一カ所で行なわれるため、親にとっては利点も多いと思われる。Ｃ群はさらに離島のため地元での医療、療育、福祉のサービス任下はＡ群、Ｂ群に比べ顕著である。療育施設や保健所の定期巡回相談にも飛行機や船舶を利用しなければいけなく、経済的、物理

的にも負担が大きく感じる。A群、B群、C群を比較すると療育そのものは地元で可能になっているが、質的、内容的にさらに差をちじめるための行政的配慮が必要と思われる。

5）まとめ

① 療育機関のある都市部と巡回療育を実施している遠隔地、その離島における療育の現状、内容について調べた。

② 定期巡回療育の展開により地域差がかなり解消されたが、実施回数及内容に検討の必要がある。

③ 離島在住の心身障害者にとって精神的、経済的負担が大きいので巡回療育の中に組み込む必要があると思われる。

④ 沖縄県内における早期発見、早期療育の枠組は形づくられたが、地元における小規模通園センターの増設が望まれる。

参考文献

落合靖男他脳生麻痺の実態調査（その4）
——出生頻度からみた発生頻度——
沖縄の小児保健：17；15－22，1990

図1.　沖縄県の心身障害児の医療、療育、福祉の地域別比較検討

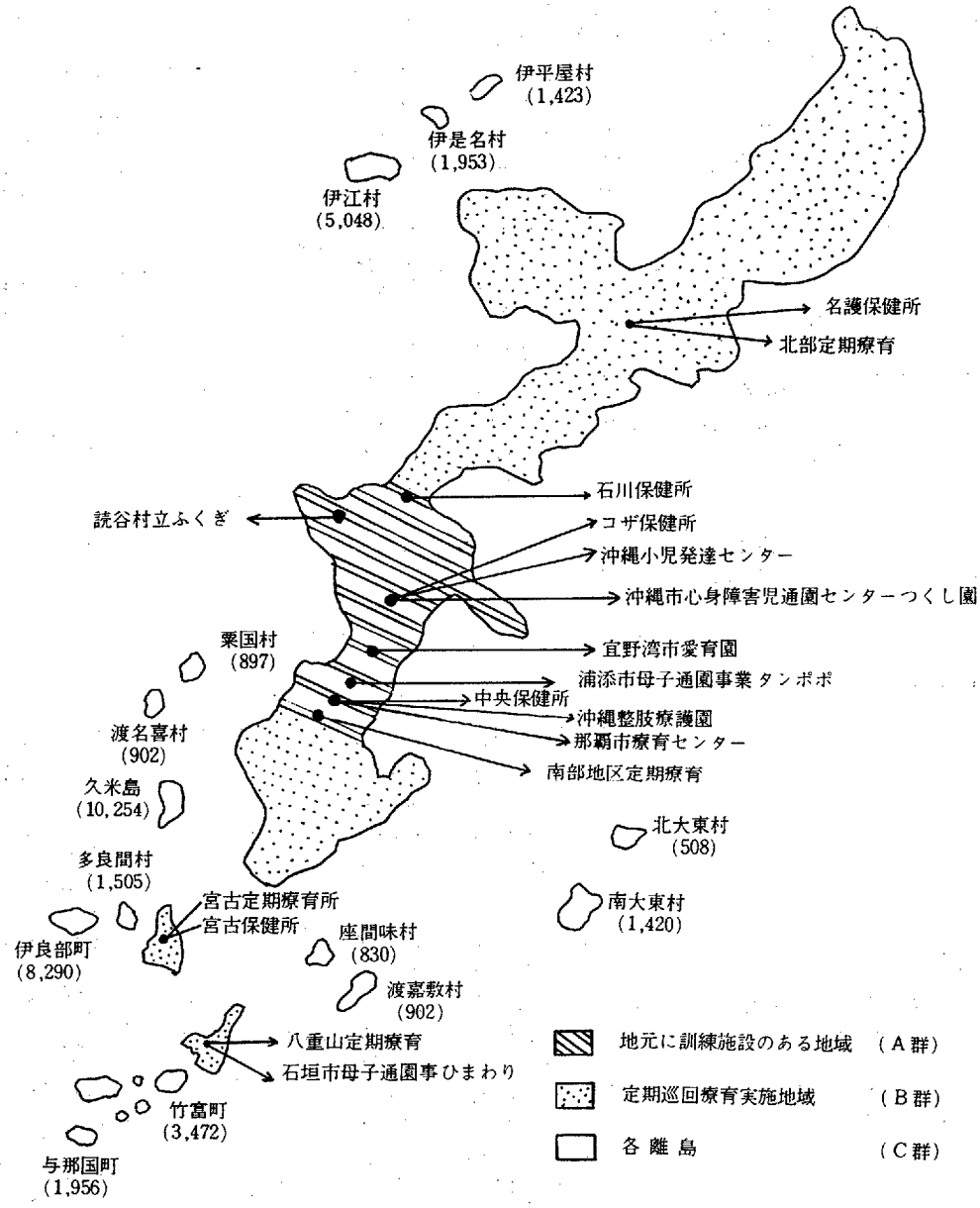

表1　沖縄県における心身障害児療育機関とその内容

A群（都市型）

名　　称	疾　患　別	療育内容及び回数	療育スタッフ
那覇市立心身障害児療育センター	脳性マヒ　11名 知恵遅れ　22名 その他　2名	理学訓練　週1回 保育指導　週3回 医療相談　月1回 言語訓練・心理判定・福祉相談は必要に応じて随時行う	医師・PT ST・保母 心理判定員 福祉相談員
浦添市立タンポポ	脳性マヒ　3名 知恵遅れ　10名 その他　1名	理学訓練　月2回 保育指導　毎日 医療相談　2ケ月に1回 言語訓練　月2回 心理判定　2ケ月に1回	医師・PT ST・保母 心理判定員
沖縄市立つくし園	知恵遅れ　10名	保育指導　毎日 医療相談　月1回 心理判定　月1回	医師・保母 心理判定員
宜野湾市立愛育園	脳性マヒ　3名 知恵遅れ　16名	理学訓練　月1回 保育指導　毎日 言語訓練　週1回 医療相談　年1回 心理判定　月1回	医師・PT ST・保母 心理判定員
読谷村立ふくぎ	脳性マヒ　1名 知恵遅れ　6名 その他　1名	保育指導　毎日	保母
石垣市立ひまわり	脳性マヒ　4名 知恵遅れ　6名	保育指導　毎日	保母
沖縄小児発達センター（通所部）	脳性マヒ　26名 その他　4名	理学訓練　週3回 保育指導　毎日 言語治療　週1回 医療相談・心理判定・看護指導・福祉相談は必要に応じて随時行なう	医師・PT ST・保母 作業療法士 心理判定員 看護婦・福祉相談員 栄養士
沖縄小児発達センター（外来療育部）	ダウン症　40名 脳性マヒ　10名 知恵遅れ　13名	理学訓練　週1回 保育指導　週1回 言語指導　週1回 医療相談・心理判定・看護指導・福祉相談は必要に応じて随時行なう	医師・PT ST・保母 心理判定員 看護婦・福祉相談員 栄養士
沖縄小児発達センター（一般外来）	脳性マヒ　48名	理学訓練　週1回 保育指導　週1回 言語指導　週1回 医療相談・心理判定・看護指導・福祉相談は必要に応じて随時行なう	医師・PT ST・保母 心理判定員 看護婦・福祉相談員 栄養士

表2　沖縄県における心身障害児療育機関とその内容

B群（定期巡回療育型）

名　　称	疾　患　別	療育内容及び回数	療育スタッフ
北部地区（名護市）	脳性マヒ　33名 知恵遅れ　42名 ダウン症　7名 その他　27名	理学訓練　月2回 言語治療　月2回 心理判定　月2回 医療相談　月1回 福祉相談　月2回	医師・PT ST・PHN 心理判定員 看護婦・福祉司
南部地区（糸満市）	脳性マヒ　15名 知恵遅れ　1名	理学訓練　月2回	PT・PHN
八重山地区(石垣市)	脳性マヒ　14名 知恵遅れ　12名 その他　2名	理学訓練　月1回 言語治療　月1回 保育指導　月1回 医療相談　2ケ月に1回	医師・PT ST・保母 看護婦・保健婦
宮古地区（平良市）	脳性マヒ　10名 知恵遅れ　24名 その他　3名	理学訓練　月1回 言語治療　月1回 保育指導　月1回 医療相談　2ケ月に1回	医師・PT ST・保母 看護婦・保健婦

C群（離島型）

名　　称	疾　患　別	療育内容及び回数	療育スタッフ
伊　江　村	脳性マヒ　1名 知恵遅れ　3名	北部地区定期巡回療育と同様で月2回船で往復する。 知恵遅れ児については障害児保育入所中	医師・PT ST・心理判定員・保健婦・福祉相談員
久　米　島	脳性マヒ　1名 知恵遅れ　1名	脳性マヒ児については月1回定期薬とリハビリを受ける為本島まででかけている 知恵遅れ児は保育所入所中	
伊　平　屋　村	知恵遅れ　1名	保育所入所中 2ケ月に　回北部地区巡回療育の中で船による往復で治療を受けている	北部定期巡回療育と同
南　大　東　村	知恵遅れ　1名	保育所入所中 小児保健協会による6カ月毎の定期健診を受けている	医師・PHN
粟　国　村	脳性マヒ　1名	1ケ月に2回沖縄小児発達センターにて理学訓練及び医療相談を受けている	医師・看護婦・PT 栄養士・ 心理判定員 福祉相談員
伊　良　部　町	脳性マヒ　2名 知恵遅れ　1名	1ケ月に1回宮古地区巡回療育にて理学訓練・言語治療・保育指導・医療相談を受けている　船で往復す	宮古地区巡回療育と同
与　那　国　町	知恵遅れ　1名	八重山地区巡回療育で相談す。・同スタップ	

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

1)はじめに

沖縄県の療育機関は那覇市(沖縄整肢療護園、那覇市立心身障害児療育センター)、沖縄市(沖縄小児発達センター)、母子通園センターとして浦添市、宜野湾市、沖縄市、読谷村、石垣市に設置されている。

都市部に療育専門機関があるため、遠隔地の人人にとって利用困難な状況にあり、それらを解消すべく、県の児童相談所を中心として北部地区において、昭和55年から、南部地区においては昭和56年から、宮古・八重山地区においては昭和57年から心身障害児の早期発見、早期療育事業を開始した。今回は療育専門機関や母子通園センターの設置されている都市部と、定期巡回療育事業を実施している遠隔地と、巡回療育が行なわれていない離島における心身障害児の実態と、医療、療育、福祉の連携について調査したので報告する。